
魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 不真面目・生真面目・凸凹兄弟in新生機動6課 ~

やまりょう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 不真面目・生真面目・凸凹兄弟 in 新生機動6課

【Nコード】

N3199Y

【作者名】

やまりよう

【あらすじ】

俺は無実の罪で管理局を追い出され、指名手配犯になった。自由気ままに異世界の山の中でグータラしながらの逃亡生活も悪くなかったんだがな。あの日空腹に耐えれなくて下山したのが間違いだっただんだ。俺はゆっくり気ままに生きれりやそれでよかったのに。新たに始まる激務生活。いや本当に暇って贅沢だったんだな。

第00話 プロローグ

プロローグ

はやてside

ここ最近妙な事件が多発しとる。

管理局の管理世界多数で、局員の”殺害”事件が多発しているのだ。しかも同時多発的に。

私はナカジマ三佐から頼まれてこの捜査に来てる。

今回被害を受けたんは第44管理世界アルメリアの駐在魔導士。二人で街の見回りをしとるときいきなり襲われて、一人は即死、証言してくれた人も重傷を負っててさっき病院へいそいで運ばれて行った。証言から分かったんは、犯人は細身で背が高く、フードをかぶって刃物型のデバイスらしき物を所持しとったうちゆうことやった。

今は一緒に来た局員二人と私のスリーマンセルで事件現場周辺を探索してる。もう何個めかわからなくなつた路地裏に入ったときに局員の一人が何かに気が付いた。

「八神二佐！その角に人影らしきものが！」

「待って！嫌な予感がする……固まって動くで！デバイスもセツトしときや！」

「了解です！」

私は嫌な予感がしたので三人でまとまって動くことにし、デバイスもセツトしようとしていた。

そしてこの後私の嫌な予感は的中してしまった……。

はやてside out

~~~~~

????side

「はあ~~~~~」

食料が尽きてもう3日、飲まず食わずで空腹に耐えられなくなった俺はつい昨日の依頼の報酬金で食料を調達しに降りてきた。

「もうアジトにゃなんにも残ってないんだよな、今回も日持ちする缶詰なんかでいいかな……いや、でもやっぱり美味しい物食べたいしな。ん」~~~~~

唸りながら街を歩く俺。

「おい、オルタ？お前はどつすればいいと思っ？」

俺は右手の人差し指にはまった相棒オルタナティブに問いかける。

「いつも酷いとは思っていましたが、ここ最近の主の食生活は見直すべきだと私は思いますよ」

と相棒からの忠告。

「やっぱりそうだよな……」

俺は相棒の言葉にうなだれながらとりあえず行きつけのスーパーを目指して歩いていった。

その途中、

「ん？なんだ、あの人だかりは？」

「何かの特売とかですかね？」

「いや、それにしちゃ空気が張り詰めすぎだろ。何か事件でもあったんだろうな」

俺は明らかにそんな雰囲気ではないようなことを口走った相棒にツッコミを入れつつ人間なら誰でも持っている好奇心と言う名の野次馬魂を胸に人だかりに混じって行った。

「なんだよ……これ……」

「血痕ですね」

「いやそんなことはわかってるけどよ．．．ひでえな．．．」

俺はその現場の状況に思わず呟き、相棒はそんな俺の呟きに律儀に答えた。そこは路地の入口で少し入ったところはとんでもないような量の血に染まっていた。何をしたらこんなに出るんだろうか。

野次馬の中には気分を悪くして離れていくものや、興味津々で食入るように見守るものがいた。そんなに見たいか？

結局その場の実況検分をしていたのであろう管理局員のお兄さん方によって野次馬はどんどん追い払われていく。

「これは絶対関わるべきじゃないな」

「はい、なんせ逃亡中の身なんですからね」

俺はさっさとその場を後にした。

そして少し行った所で、

「あれはさっきの事件の捜査か？」

「そのようですね」

3人で路地に入っていく管理局員を見かけた。

「ホント、大変なこった。さて俺達は買い物終わらせてとっとと帰ろうか」

「そうですね主」

俺達はなるべく関わりたくはないのでその場をさっさと通り過ぎた。



「さあて、久々の飯は何n・・・!?」

(今のは魔力!?)

「主!」

「ああ、わかつてる、馬鹿デカイ魔力反応だ・・・」

俺はいきなり出現した巨大な魔力に反応した。

そして俺とオルタが魔力を感知した瞬間、さっきの局員のものと思われる悲鳴が聞こえてきた。

「うあ” ああああああああ

「チクシヨー!!この野郎!!あ” ああああああああ

「二人とも!!大丈夫か!?つきやあああ!」

なんかかなりやばそうな雰囲気だ。

「オルタ、行くぞ!!」

「了解、セットアップ!!」

??? side out

~~~~~

はやては危機に陥っていた。

部下が見たという人影を追って3人同時に角を曲がったのだが、相手の待ち伏せ攻撃によって部下2人が一瞬のうちに沈黙させられ、彼女もまた、首を掴まれ壁に押さえつけられた状況である。デバイスを起動するどころではない。

「うつ．．．離さんかい．．．この．．．」

「こんな状況でもまだ啖呵を切れるのだな、いやぁ関心関心。流石は歩くロストログアってとこだな」

「なんで．．．私のこと．．．知って」

「当然だ、なんせ俺は2年半前までは管理局員だったからな」

はやての問いに目の前の男はフードの下で薄気味悪い笑みを浮かべながら答える。

「なんやて！？なんで元管理局員がこんな事件を起こしたんや!？」

驚愕の返答にはやては更に詰め寄る。

「そんなもん嫌いだからに決まってるだろ？邪魔なんだよ管理局つづつ組織はなあ、俺達みてえな研究者の偉大な研究になんでもかんでも規制ばっか付けやがってよお。少しでも規制から外れりゃ即犯罪者、おまけに俺たちの最高傑作を牢屋なんかにぶち込みやがって。」

「最高傑作……？牢屋？なんのことや!？」

「おいおい、お前たちが解決した大事件だぞ？忘れたとは言わせねえ」

彼女たちが解決した大きな事件、それは……

「まさか……ジエイル・スカリエツィー!!」

「ご明答、あいつは俺たちの優秀な作品兼駒だったんだがな、たかが新設の部隊なんぞに遅れを取るとはとんだ期待はずれだったよ。まあ脳みその指示に従って作ったにしちゃいい出来だったし、次のイベントに役立ちそうだしな。今度取り返させてもらおうとしようか。」

「次のイベントやと?」

「おおつと、これ以上喋ったら台無しになっちまう。危ない危ない。まあお前らごときにや止められんがな。今喋ったことだつてちつともつたないがお前を始末すりゃいい話だ。元々帰す気は更々ねえしよ。」

男が何かをポケットから取り出した。

それは30センチ程の長さのナイフ型のデバイスだった。

「実験用のモルモットでも良かったんだが、やっぱり危険因子は早めにご退場願おうか。」

部下の局員は二人とも血を流して倒れてぴくりとも動かない。はやて自身も抑えられていて動けない。

刃はもう心臓のすぐ正面まで来ている。

(終わりなんか……？私は……ここで……)

その時、

「オルタナティブ、トゥー・ハンドモード!!」

「了解！」

ドオン ドオンドオン!!

どこからか二丁拳銃を持った人影が現れ発砲した。

「なんだ!？」

いきなりすることに男の腕がはやてから離れた。
その隙にはやては男から距離をとる。

「まずは要救助者確保お!!あとは犯人逮捕のみい!!」

ドオン ドオンドオンドオンドオン!!

人影はまだ撃ち続ける。

というか撃ちまくっている。
声からして男性のようだ。

「ええい、クソ……面倒な、撤退するしかないか……」

人影がトリガーハッピー状態の間に男は転移魔法で逃走した。

「ヒヤアツホオオウ!!! 久しぶりに魔力弾の無料配布だぜ!!!」

「ですが主、目標は逃走しましたよ？」

「え？あ、ホントだ・・・ちい・・・」

相棒の声で我に返ったその人物はなぜかしょんぼりしていた。そして開放されたはやては、

(なんかようわからんけど・・・助かった~~~~)

安堵のため息をついていた。

「はっ!? ため息ついたりする場合やない!! 二人とも、大丈夫か!？」

「な、なんとか・・・」

「生きてはいます・・・」

襲われた部下の2人はいつの間にか意識が戻っていた。

切られたのであろう傷口からは血が流れ出ている。

致命傷にはなっていないが大事をとって応急手当を施す。

「その人、ホンマにおおきに。おかげで殺されずにすんだし、仲間も助かりました。」

はやてはお礼を言う。

「いや、大したことはしていないし、それにあんな悲鳴上げられた

「ら気にせずになんかいらねえよ。まあ助かってよかった。」

その人物は笑顔で答える。

「あの、よかつたらお名前教えてもらえませんか？」

はやては恩人に名前を聞く。

「俺か？俺の名前はレオン、レオン・イエーガー」

「私は八神はやてっていいます、よろしくな、レオンさん。ほんでな、レオンさんちよつと事情聴取に付き合っつて貰われへんやるか？一応さっきので事件の関係者になつてもうたし、デバイスも持つつとるやる？無許可でのデバイス所持は一応法律上禁止やからな。書類照合だけでもしたいんよ。」

レオンは一応デバイス所持の許可は持つている。

だが今は追われる身だ。ひょんなことから素性がバレれば即効で刑務所送りである。

「……助けたつてことでチャラにならねえか？」

「ごめんなあ、一応規則やから……まあそこは私がなんとかするから安心して。」

絶対悪いようにはさせへんから。だから……お願いや」

はやてがレオンに頭を下げてお願いする。

「おいおい、頭なんか下げんなつて。分かつたよ行くよ、事情聴取……いけばいいんだろ？」

ここはレオンの負けである。この男は女性の頼み事には逆らえないのである。

だがここで素性がバレると即逮捕となるわけだがどうする？

レオンの頭の中ではこの危機をどうやって切り抜けるかのシミュレーションが始まった。

(ホントにどうしよう・・・)

t o b e c o n t i n u e d

第00話 プロローグ（後書き）

初めまして、やまりようと申します>m(|)m<
今回が初めての投稿となります() () ; 。 () () ()
色々ななのは創作の作者様の作品を読んでもうちに「俺も書いてみ
ようかな・・・」

と思ったのが始まりで遂に今回投稿させていただきました。

駆け出しで色々お見苦しい点が多々あるでしょうが、生暖かい視線
で見守ってやってください>m(|)m<

もしよろしければコメントやアドバイスなどもいただければ嬉しい
です(# ^ . ^ #)

最後になりましたが「魔法少女リリカルなのはStrikers」
不真面目・生真面目・凸凹兄弟in新生機動6課」をどうぞよろ
しく願います>m(|)m<

第01話 無罪の証明（切実）（前書き）

第1話の投稿です（、・・・、）

アイデアが消えない間に書かないと）；・・（・）

とりあえず週1〜2話のペースで書くようにします！

最低でも週1では上げます。

第01話 無罪の証明(切実)

レオンside

さあ、厄介なことになってきた．．．．断りきれずに了承してしまった事情聴取の為に俺はミッドに向かっている。あの後も、襲撃犯の捜索をしたのだが結局見つからずじまいだったのでとりあえず一度ミッドに戻ろうということになったのだ。勿論拒否なんか出来る訳がない．．．．

「はあ~~~~~」

俺は思いっきりため息をついた。

「レオンさん、そんなに市場聴取されたらバイ人間なんか？私には全然そつは見えないんやけど？」

先程からずっとテンションの低い俺にはやてはそつ言ってきた。

「いや、ちょっと事情があつてな．．．．」

「事情？その事情とやらもし良かったら聞かせてくれへん？嫌やつたら全然ええけど．．．．」

「．．．．この場で逮捕とかしない？」

「せえへんせえへん、大丈夫や！」

まあはやてなら嘘はつかないかな。まあいいかな。俺ははやてを信用して大まかな事情を説明し始めた。

「あれは5年前位前の出来事だ。俺は当時管理局の局員でロスト口ギアの横流し事件の捜査をしていたんだ。結構何人も人間が絡んだ事件だったから局も本腰を入れて対応してたんだ。俺も色んな世界に捜査に行つてその犯人たちを捕まえた。

でもその時は結局黒幕が出てこなかったんだ。全員口を揃えて「俺は利用された！」だの「頼まれただけ」だの適当なことばかり言つてたな。んで黒幕を吐かせようとしても何故かみんなダンマリだった。

俺はまさかとは思つたが捜査の範囲を局の中まで広げた。そして黒幕を見つけたんだ。そいつは当時本局の中将の立場の人間だった。俺は最後にそいつに鎌を掛けに行つたんだが、護衛の魔導士達に取り押さえられたんだ。どうやら嗅ぎまわつてたのがバレてたらしい。その後奴は俺に罪をなすりつけ、俺が捕まえた囚人達の証言も「黒幕はレオン・イエーガー」って言うように徹底しやがったんだ。そんでその改ざんした情報を捜査を行なつた局員全員に流したんだ。その結果が5年間の逃亡生活で今のこれ。まっ、こんな感じだ。」

とりあえず話は終わったけど、あれ……？はやてが黙り込んでしまった。

「は、はやてさん……？」

「……へん……」

「ん？」

「許せへん……！」

「おわっ!!!?」

何故かいきなりはやてが大声で怒鳴った。

「なんやそれ!!レオンさん何も悪ないやんか!!なんで真面目にやっつたレオンさんがそんな役回りせなアカンねん!!そんな自分の欲の為に他人犠牲にするなんか最低なことやんか!!そんな不当な理由で追い出すなんか管理局も管理局や!!」

はやてがすっごく怒ってらっしゃる.....

「まあまあはやて、落ち着けよ.....」

「落ち着いていられるかあ!!そんなふざけた奴絶対私が捕まえる!!そんでレオンさんの濡れ衣もちゃんと晴らしたる!!」

「わかった、わかったから今は落ち着こう、なっ??なっ??」

「ん?レオンさんがそう言うなら、まあ.....」

俺はなんとかはやての怒りを静めた。はあく怖かった.....でも他人のことでこんなに自分の身に起きたことのように怒ることが出来るのは彼女が本当に優しいからなのだろう。やべ.....なんか涙出てきそう.....

「あれ?でも私指名手配の書類とかでレオンさんの顔なんか見たことないで?」

はやては不思議そうに言った。

「え？そうなのか？」

「うん、私一応特別捜査官やからそういう書類とかよう見るけどレオンさんの顔見たんは初めてやで？」

「どういうことだ？俺が指名手配になってない？」

「ちなみにその黒幕の中将の名前とか覚えてる？」

「ええっと．．．．．確か．．．．．ウェイド．．．．．そう、ウェイド・プライム中将だったはず．．．．．」

「ちょっと待つてな、調べてみるわ」

はやてが目の前にコンソールを出して何やら叩きだした。

「あっ！！！！」

はやてが驚きの声を上げた。

「どうした？」

「中将はもう捕まってるみたい．．．．．」

「．．．．．え??????」

俺は一瞬何を言ってるのかわからなくなった。

「罪状はロストロギアの横流し、ちゃんとレオンさんの証言と一致

しるる」

「誰が気づいたんだ？俺が真犯人じゃないって……」

俺の無罪を主張しようとした奴らの意見なんか上層部は聞いていないはず……一体誰が……

「発覚したんは中将の自白らしい」

「え????自白????」

自白???わざわざ俺に罪をなすりつけたのに???どゆこと???

「尋問を担当したんは……!?!」

「今度はどうした?」

はやてがまた驚きの表情を示す。

「アレン・イエーガーって、これってもしかして……レオンさんの家族?」

「ああ、弟だ……そうか……あいつがやってくれたのか……」

そこに記されていたのは俺の超良く出来た弟、アレン・イエーガーの名前だった。

レオン side out

第01話 無罪の証明（切実）（後書き）

今回でレオンの逃亡生活の理由と無罪の証明を書きました。

ちと急展開かなと自分でも少し思いはしたんですがこれ以上は伸ばせなさそうなので)m´´´´´(m

次話からはミッドでの話になります。

なのはさんや我らが女神フェイトさんも出していこうと思いますので次もよろしくお願いします>m(´´´´´)m<

最後に今回も読んでくださった方々、本当にありがとうございます！！

少しでも読んでくださっている方がいると作者の励みになります！！コメントやアドバイスもドシドシ送ってくださいるとな嬉しいです！！

では今回はこの辺で)´´´´´(ノシ

第02話 帰還と再開と

i n 陸士108部隊隊舎

~~~~~

はやてとレオンは事件の報告のため、今回の依頼主であるゲンヤ・ナカジマのもとを訪れていた。レオンは一応関係者となってしまうため連れてこられたのだが別にそこまで嫌ではなかったらしい。何故なら先ほど自分の5年間にも及ぶ長い逃亡生活が完全に無駄の一言だったことが発覚したからだ。本人は喜ぶべきか悲しむべきかとかなり複雑な顔をしていた。

コンコン。

「八神特別捜査官、事件の報告に参りました」

「おう、入ってくれて構わねえぞ」

はやてのノックと挨拶に部屋の主はそう答えた。

「失礼します」

「ああ。無事に帰ってきてくれて何よりだ。悪かったな八神、うちの仕事回しちまって。ところでいきなりなんだがお前の後ろのその男はナニモンだ？どっかで見たことある気がするんだが . . . . .

「

ゲンヤは部屋に入ってきたはやての後ろにいるレオンのことを聞く。

「ゲンヤさん、5年ぶりです。仕方ないのかもしれませんが元部下の顔くらい覚えててくださいよ……………」

「え!？」

レオンの発言に驚くはやて。

「ん?ってお前まさかレオンの坊主か!？」

「そうですね、お久しぶりですゲンヤさん」

ゲンヤはレオンの発言から彼のことを思い出したようだ。レオンもゲンヤに5年ぶりの挨拶をする。

「久しぶりじゃねえか!5年間も一体どこほつつき歩いてたんだ? あん時お前の部下たちが半泣きで探してたんだぞ?俺だって部隊を挙げて探してたんだからな?」

「いや、ホントにスンマセン」

ゲンヤにそう言われて素直に謝るレオン。

「あの時は会う局員という局員が追いかけて来てて、弁解の余地もなさそうだったんでさっさと異世界へ逃走してたんですよ。ミッド内を探してたんなら永久に見つかりませんでしたよ?」

レオンは自分の鮮やかな逃走を自慢げに語る。

「あの……………」

「ん？どうかしたのかはやて？」

はやてがおずおずと手を挙げる。

「レオンさんはナカジマ三佐と知り合いなん？」

はやてが気になってたことを聞いてきた。

「知り合いつてか元上官で、ある意味父親代わりみたいなものだ。俺が10歳のときからの付き合いで、17歳までは108部隊で面倒を見てもらってたんだ」

「そうやったんや。ところでナカジマ三佐、小さい頃のレオンさんてどんな子やったんですか？」

「おい、なんでんなこと聞くんだよ……？」

はやては興味津々にゲンヤに聞いた。レオンは不服そうだ。

「ん？そうだなあ……ホントに手間がかからないガキだったな。アレンの面倒も良く見てたし、たまにうちの娘達の面倒まで見てもらったからなあ。面倒見とか人間性には全然問題無かったんだが、書類仕事が壊滅的に遅かったな……というかサボってばっかだったるお前……？」

「バレてた！？」

「当たり前だ、何年面倒見たと思ってんだ」

ゲンヤの口から語られるレオンの幼少期。はやては終始興味津々で聞いていた。

「やっぱりレオンさん、ええお兄ちゃんしとったんやね」

「やっぱりってなんでだ？まだ会ってからそんなに経ってないし、お前の面倒見たことなんかないだろ？」

はやての言い回しが気になったのかレオンはそう聞いた。

「だって逃走中の犯人の身で、管理局の人間が襲われてるのなんか普通は助けへんやろ？自分が捕まるリスク犯してまでわざわざ助けてくれたレオンさんはやっぱり昔から優しい人やったんやなと思っ  
てな」

はやては屈託の無い笑顔でそう答えた。

「!?!」

レオンは思わずその笑顔にドキッとしてしまい顔を背けた。

「あれ？レオンさんどないしたん？」

「な、何でもねえよ……………」

「??？」

「そ、そういえば事件の調査報告はいいのか？」

「あっ、そうやったな。報告してもよろしいですか？」

「ああ、そうだったな。頼む」

レオンはとりあえず話題を変えようとそう切り出した。ゲンヤとはやては事件の報告のことを完全に忘れていたようである。

はやては報告を始めた。

「先日の第44管理世界アルメリアでの局員殺傷事件ですが、犯人は刃物型のデバイスを所持しており、被害者の局員二名の内一名を即死させています。遺体の損傷は一箇所の刺し傷のみで、心臓をほぼ跡形もなく潰されていました。」

重傷の局員は心臓に向けて突き出された刃を避けたため右の肩を負傷していましたが命に別状はありませんでした。

その後、街の調査中に私と捜査員二名は犯人と思わしき魔導士と交戦。捜査員二名は恐らく射撃魔法による負傷、私も一時は敵の手に落ちそうになりました。しかしその際に犯人はわざわざ自分の目的のようなものを私に聞かせました。」

「目的？」

「はい。犯人は自分を二年半前のJ・S事件の犯人ジェイル・スカリエッティのクローンニングの研究者の一人だと言い、いずれはスカリエッティを取り返しに来るとのことです。どうやら犯人はまた新たな大事件を起こすつもりようです。ここまでが私の調査の報告です。まあ後半は私が捕まった際に犯人が勝手にしゃべってくれたんですけどね。そこでこの後殺されそうになった私をレオンさんが助けてくれたちゆうことでなんです。」

はやての報告が終わり、ゲンヤは厳しい顔付きで黙り込んでしまっ

た。

そしてその長い沈黙はレオンによって破られた。

「ところでさ、聞きたいんだがジェイル・スカリエッティって誰なんだ？ そんなに有名なのか？」

この男、空気は読めないらしい。

「え！？ レオンさんスカリエッティを知らんのんか！？」

「おいおい、いくら無知だからってそれは……………」

さすがのはやてとゲンヤも驚く。

「だって……………俺今日の今日まで山の中で生活してたしミッドなんか5年間ご無沙汰だったんだぞ？ そんなの知るわけねえじゃん……………」

そう、この男は元指名手配犯で5年間別世界の山中で逃亡生活（無駄）していたので、そんなこと知るはずがないのだ。

「ああ、そういやそうだったな。悪い」

「ほな説明したるけどな、ジェイル・スカリエッティは生命操作や生体改造、精密機械とかに通じた科学者でな、ロストログアとか以外にも色んな事件で広域指名手配されていた次元犯罪者なんや。二年前のJ・S事件っていう大事件の実行犯でもあるんよ。」

「中々の悪党だな。んでも精密機械とかの研究者か……………面白そうだな……………」

はやての話を聞いてレオンはスカリエツティという男に興味が出た。

「面白そうって?」

「いや、俺も機械の研究とかかなり本気でやっつるたんだよ。だから結構気持ちはわからんでもないっていうかな。まあ違法はダメだと思いがな。研究するのは突き詰めれば突き詰める程奥へ奥へのめり込みまうもんなんだよ。それが過ぎたつてもあると俺は思うんだよな」

「へー、そういう風に考えるんやなあ。まあ私も違法さえしてなければホンマにすごい人やとは思っくんやけどな、J・S事件のときのあの変態チツクな態度が忘れんくてな、ちよつとかばう気にはなれんわ。というかかばう必要もないしな」

はやてはバツサリと切る。

一方でレオンはスカリエツティに興味があるらしい。彼自身も機械分野での研究はかなり行なってきたので、同じ学者という仲間意識でもあるのだろう。

「そっぴや八神、犯人はスカリエツティを狙ってんだろ?渡しちまつたら確実に面倒なことになるがどうするんだ?」

ゲンヤがそう聞く。

「まずはスカリエツティの事情聴取に行ってきます。それから一応こちらで保護しようと考えてます」

「そうか。でもどこで、どうやって保護するんだ?」



「それなんですけど、私はまた新しい部隊を設立を進言しようと思ってるんです。今回の連続魔導士殺害事件の犯人がスカリエツティと関係があつて、更に大きな事件を起こそうとしてるんやったらそれを全力で阻止するのが私の、いや私たちの役目やと思ってるんで。」

はやてが自分の新たな目標を掲げた。

「なるほどな、ならうちの部隊も全力で協力させてもらつとするか」

「ありがとうございます、ナカジマ三佐」

ゲンヤはいつもの調子でそう言い、はやては感謝の言葉を述べた。

「おお、そうだレオン」

「?どうしたゲンヤさん」

突然ゲンヤがレオンを呼んだ。

「一応アレンに連絡を入れてやるから後で兄弟水入らずで話でもしたらどうだ?なんせ一番お前を心配してたのはアレンだからな」

ゲンヤはレオンにそう提案した。

「そうですね、お願いできますか?」

「おう、ちょっと待ってる」

そう言ってゲンヤはアレンに通信を入れた。

~~~~~

アレン side

任務が完了し地上本部に帰ってきた僕は廊下を歩いていた。この後書類を作って提出すれば完全に今回の任務は終わる。そんな時、デバイスに通信が入った。相手は兄の元上司のゲンヤ・ナカジマ三佐だ。

「よう、アレン。元気にしてるか？」

いつもの様に明るく接してくれるナカジマ三佐。

「はい、お陰様でなんの異常もありません。ナカジマ三佐はお加減いかがでしょうか？」

「んな硬くなるなよ。やりにくいぞ？」

僕の硬い挨拶にナカジマ三佐は若干引いていた。

「ス、スミマセン、ゲンヤさん！」

「そう、それでいいんだよそれで。そのほうが話やすいだろ？」

ゲンヤさんはそう笑顔で返してくれた。そして僕は通信の理由を聞くことにした。

「ところでゲンヤさん、何かご用でも？お手伝いならいつでもしに行きますが……」

「いやそうじゃねえ、お前に報告だ」

ゲンヤさんから僕に報告？なんだろう？

「こいつが誰かわかるか？」

そう言ってゲンヤさんがモニターに映したのは……

「よう、アレン。元気にしてたか？」

「……兄……さん!？」

僕の唯一の肉親であり目標である、行方不明のはずの兄レオン・イーガーだった。

Arens side out

第02話 帰還と再開と・・・(後書き)

遅くなりました>m(| |)m<

今回でなのはさんたちを出したかったのですがちょっと予定変更で
出せませんでした()()。;() () ()

次回も出るかは微妙です(、; ; ; ;)

今回は最後にレオンの弟でもう一人の主人公であるアレン君に登場
してもらいました(^ ^)

出すタイミングがわからなくて苦戦しましたが・・・・・・
ということでは兄弟のお話になります。

なのはさんのファン、フェイトさんのファンの皆様!!

もう少しお待ちを!!>m(| |)m<

では今回はこの辺で失礼します(、|、)ノ
いつも読んでくださってるみなさまに感謝!!

第03話 「おかえり」

レオンside

「……………兄……………さん!？」

「おう、久しぶりだなアレン。元気そうじゃないか」

アレンは驚きを隠せないみたいだ。うむ、
いいサプライズだったかn……………

「久しぶりじゃないよ!！」

「!？」

なんか凄く怒ってらっしやる……………

「僕がどれだけ心配したと思ってるんだ!? 僕だけじゃない、ゲン
ヤさんやギン

ガにスバル、兄さんの部隊の人たちもみんな心配してたんだぞ!？」

アレンが物凄い剣幕で怒ってる……………怖ええええ……………

「ス、スマン。ホントにスマン!！」

とりあえず謝らないとヤバそうだ……………

「ホントに全く……………でも無事でホントによかった」

アレン．．．．．ホントによく出来た子！！

「そうだ、アレン。お前今から時間あるか？久しぶりに兄弟水いらずで話でもしないか？」

俺はアレンにそう訪ねてみる。
すると、

「20分待つてくれないか？すぐに仕事を終わらせて向かうから！」

今からと言っても仕事を終わらせて来るとは、やっぱり真面目だな。アレンらしい。

「わかった。それじゃあ待ち合わせは108b．．．．．」

ブチッ！！

切りやがった！！そんなに急がないでも俺は逃げねえよ。

「はあ、ったくあいつは．．．．．人の話は最後まで聞けよな．．．．．」

そついいながらも俺の顔はほころんでしまった。

レオンside out

~~~~~

アレンside

兄さんが無事に帰ってきた。あの日から5年もたったけど生きて帰ってきてくれた。未だに夢なんじゃないかって思いそうだ。

「まったく……心配させないで欲しいよ……」

僕は頬が緩みながらもそんなことをつぶやいた。

「さあ、ブーツとしてる場合じゃない！ さつさと仕事を終わらせないと。うーん、これぐらいなら20分どころか10分くらいでいけるかもん？ そういえば兄さん最後に何か言いかけてたような……まあいいか！」

何か気になることがあったがとりあえず僕は本日最後の仕事に取り掛かった。

「おい、アレン。人の話は最後まで聞け」

「う、うめん兄さん……」

その後兄さんからの通信で待ち合わせ場所を聞くついでに少し怒られてしまった。

アレン side out

~~~~~

レオンは陸士108部隊隊舎の前でアレンを待っていた。話の途中で通信を切ったアレンにはちゃんと連絡を入れ直したので待ち合わせの場所がわからないなんてことにはならずにした。そしてちょうど20分後にアレンは待ち合わせ場所にやってきた。やはり誰かさんと違ってきっちりした男である。

「おつ、来た来た。こつちだぞアレン」

「お待たせ兄さん。ゴメンね、遅くなって」

「いや、時間ちょうどなんだから気にすんなよ。それに呼び出したのは俺だしな」

なんだか会話だけならリア充っぽく聞こえるがこの二人、男なうえに兄弟なのであしからず。

「どうだ？元気にしてたか？」

レオンはそう切り出す。

「僕は全然病気もしてないし大きな怪我もなかったよ。兄さんこそ怪我とか病気とかしなかった？」

「まあな」

本当にお互いのことが心配だったようだ。どんだけ仲いいんだこいつら。

「いや、でも一度死ぬかと思ったことはあつたな」

「え！？大丈夫なのか!？」

「まだ内容言っていないだろうが。怪我じゃなくて、うゝん……
なんて言つんだらう……。そう危機感的な奴？」

「???どういう事？」

「仕事でそういうのがあつたんだよ」

「仕事っていえば兄さん、逃げてる間どうやって仕事してたの？普通には働けないんじゃないの？」

アレンは逃走中の身でありながら働いていたというレオンに疑問をぶつけた。

「ああ、非公式ななんでも屋みたいな仕事だよ」

「なるほどね。それでどんな仕事でそんな目に？」

「ん〜、竜の討伐」

「……は？」

レオンの思わぬ返事に固まるアレン。

「いや、なんか色んな仕事やってるうちに有名になっちゃったらしくて別世界から依頼が来てな。行ってみたら赤い竜と緑の竜が依頼主の村の近くで暴れてるんだよ。んでそれと戦って一応遠くの方へ追っ払ったんだ」

なんとという規格外な男……ほらアレン君固まっちゃったじゃないか。

「まあそれ以来は大きな以来とかはなかったんだがな」

「そ、そうなんだ。それじゃあどうしてこっちに帰ってきたの？指名手配が解除されたこと知らないんじゃない？」

「ああそれはな、俺の住んでた世界でやばそうな事件が起きたんだ。俺は晩飯の買い物中だったんだけど、捜査中の管理局員が襲われて、その犯人を追っ払ったら一応事件の関係者ってことでここに連れてこられたってところかな」

「な、なんかすごいことになってるね……………」

レオンの逃亡生活の話を聞いてアレンはそう感想を漏らした。

「でも……………また会えて嬉しいよ。おかえり兄さん!!」

「おう、ただいまアレン」

何はともあれミッドに帰ってきてよかったと思うレオンであった。

~~~~~

### 第03話 「おかえり」(後書き)

遅くなりました(´；；´)(´

第03話になります>M)——(M<

いつも読んでくれている、皆様ありがとうございます!!

この間初めて評価とコメントが付き作者は涙で前が見えません。(

。、、。(。

もしよろしければコメントなどもお待ちしておりますのでよろしく  
お願いします!!

第04話 「新部隊?いいえ、ほぼ前のままです」(前書き)

どうも、学校のレポートがあるにもかかわらず執筆をしている作者  
です。M(――)M^

そろそろ新しい部隊の話を書いていきたいと思います!!

うまく書けるかな。(。(。。(。(

てなことで本編をどうぞ。(ノ

第04話 「新部隊?いいえ、ほぼ前のままです」

~~~~~

はやて side

レオンさんとアレン君が再開を喜んだ次の日、私は新部隊設立の提案をしに聖王協会へ行ったんやけど二つ返事でOKされてしまった。どうやらカリムの「預言者の著書」で今回の事件が大事になるような予言が出てたらしい。後見人もカリムは了承してくれたし、クロノ君も問題は無いらしい。

「あれ?なんかうまく行き過ぎやないかこれ?」

私は思わず呟いてもうた。まあ一回目の部隊設立のときはようさん反対意見とかあった中での設立やったから手こずったけど、J・S事件解決のこともあるから今回は当たり風が無いに等しい。正直こっただけ上手くいくとはこれっぽっちも思ってたけど……

「ま、うまくいくにこしたことないし、次はメンバー編成といこかな」

私は設立が了承されたことと部隊編成の為、最高の友人たちへ連絡を入れることにした。

はやて side out

~~~~~

なのはside

「はあ、今日のお仕事も終わった。今年入ってきた子達は優秀だからこつちも教えがいがあるよ」

「でもまだまだヒヨッコだ。これからどんどん鍛えていかないとな」

私は今日の教導が終わってヴィータちゃんとおしゃべりしながら歩いてきた。ヴィータちゃんはぶっきらぼうに敵しいこと言ってるけど機嫌は悪くないみたい。むしろ楽しそうに見える。

「あつ、そういえばヴィータちゃん」

「ん？どうしたなの？」

「はやくちゃん任務から帰ってきたんだよね？捜査は順調に進んでそうなの？」

私は任務で他世界へ行ってたはやくちゃんのことを聞いてみた。

「いや………犯人は見つけたみたいだけど逃がしちゃったみたいだ」

「えっ？はやくちゃんが？」

「ああ．．．．それに犯人に襲われて一緒にいた局員が大怪我したらしい。はやてもあと少し救出が遅れてたら．．．．．殺されてたかもしれないって．．．．．」

「え！？怪我とかはしてないの!？」

「特に怪我らしい怪我は無かった。はやてを助けてくれた奴に感謝しなきゃな」

「良かった。でも誰がはやてちゃんや怪我をした局員の人たちを助けてくれたんだろう?」

私は怪我がなかったと聞いてホツと胸を撫で下ろした。それと同時に一体誰がはやてちゃんたちを助けてくれたのが気になった。

「助けてくれたのは通りすがりの魔導士なんだって。なんか元管理局員らしい」

「そうなんだ。でも”元”って?」

「それは私も聞いてないんだ」

私はヴィータちゃんの言い回しに引っかかりがあったから聞いてみるとヴィータちゃんも知らないらしい。

「ああ、そういえば」

「?どうかした?」

「なんかはやてが今回の件でお前たちに話があるから近いうちに連



絡を入れるって言ってたぞ」

「あ、うんわかった。って言ってるそばからはやてちゃんから通信だ」

噂をすればなんとやらというか丁度いいタイミングではやてちゃんから通信が入った。

『なのはちゃん、お久しぶりや』

「うん、久しぶりだねはやてちゃん。どうかしたの?」

『うん、ちょっと大事な用事があるんよ。これから少し時間あらへんかな?』

「うん、大丈夫だよ。一度家に戻ってヴィヴィオのお出迎えと晩ご飯の支度をしないといけないけど、それからでもいいかな?」

『全然かまへんよ。むしろヴィヴィオを優先したって。ゴメンな無理言つて』

「そんな、無理なんかじゃないよ。はやてちゃん家でいいのかな?」

『うん、それでかまへんよ』

「あつ、フェイトちゃんにも連絡したほうがいいかな?」

『うん、そうやけどそれは私が後でしt.....』

「私が連絡しておくよ」

『わかった、お願いするわ』

「うん、時間はどうすればいいかな？」

『ほな9時でええかな？』

「うん、わかった。それじゃあまた後でね」

『うん、ほなな』

私は通信が終わるとフェイトちゃんに連絡をいれることにした。

なのはside out

~~~~~

フェイトside

「なんか最近事件多すぎないかな？」

私は書類仕事をしながら咳いてしまった。だって今週に入ってもう三回も執務官として事件の收拾に飛び回って、更にこの書類の山なんだもん。愚痴の一つや二つ言っちゃうよ。今やってる書類もさっき解決した事件の報告書だしこれがほぼ毎日続いているんだからたまつたもんじゃないよ……

「何かよくないことでも起こってるのかな……」

私はそんなふうを考えてしまう。大小問わず事件が連続で起こっているのだから何か関連してる可能性も考えないと……

「大きなことにならないうちに調べてみようかな」

私は最近の事件のの概要を調べようとした。
その時、

「ん？通信だ。なのはから？」

なのはから通信だ。どうかしたのかな？

『やつほ〜、フェイトちゃん。久しぶり〜』

「うん、久しぶりなのは。どうしたの？」

『えつとね、今夜ちよつと時間あるかな？』

今夜は特に何も無い。調べ物をしようとは思ってたけどまあいつか。

「うん、大丈夫だけど何かあるの？」

『はやてちゃんが私達に話したいことがあるんだって。それでさっきはやてちゃんから連絡があっただけけど大事なことなんだって言うってた』

「はやてが？わかった、行くよ」

『場所ははやてちゃん家で夜の9時だって』

「うん、わかった。それじゃあまた後で」

『うん、またね』

はやてから大事な話か．．．．．なんだろう？

「じゃあ尚更早くこれを終わらせないと！」

私は残りの仕事を片付け始めた。

フエイトsideout

~~~~~

in八神家宅

「みんな、わざわざ集まってもろてありがとう」

「ううん、気にしないではやてちゃん」

「そっだよはやて」

はやての挨拶になのはとフエイトは答える。

「我らにも関係があることのようにだな」

「そっみたいね。何か大事なことみたいだけど」

「.....」

「どうかしたかヴィータ？」

「いやなんでもない」

守護騎士も全員揃っている。そんな中はやては話し始めた。

「ほな始めるけどここ最近妙に事件が多いんはみんな知つとるよな？」

「うん、私もここ数日のうちに何回も出撃してるから」

フェイトが答える。

「私も何日か前にナカジマ三佐に頼まれてちょっと出張しottaんよ。今回の事件は駐屯局員の襲撃と殺害。被害者二人のうち一人は重傷でもう一人は即死やった。ほんで周辺の捜査をしottaとき犯人に襲撃されてな。そんな時に犯人が妙なこと言ottaってん」

「妙なこと？」

なのはが疑問を口にする。

「まず一つは犯人はスカリエッティのクローニング実験に携わottaこと」

「え！？それってどついでいottaと！？」

フエイトが大きく反応する。スカリエッツィの考案した技術で生み出され、その技術に因縁のある彼女なら仕方のないことだろう。

「そのことについてはあんまり聞けんかったんよ。ゴメンな。ほんで二つめ、犯人は元々は管理局の人間やったつちゆうことや。なんか色んな研究する科学者やったみたいや。でも二年半前のJ・S事件が解決した時に逃げたらしい。三つめ、これが一番大事な話や。犯人は管理局に恨みがあつて、また大きな事件を起こそうとする。スカリエッツィを利用してな」

はやてはおおまかな内容を話し終えた。

「え！？でもスカリエッツィは軌道拘置所に収監されてるはずじゃ  
.....」

「犯人はスカリエッツィを取り返しに来るとも言うつつた。いつかはわからんけど近いうちに確実に軌道拘置所は襲撃を受ける」

「そんな！！だったら今のうちに対策を考えないと.....！」

「そこでや。こっからはなのはちゃんとフエイトちゃんに協力して欲しいことやねんけど」

はやては今日ここに二人を呼んだ本当の目的を話す。

「私はまた新部隊を設立することを決めた。もうカリムにも話は通したし、後見人の件もあらかた片付いとる。あとはなのはちゃんやフエイトちゃん達の協力を得るだけなんよ。勿論6課のフォワードメンバーやロングアーチにも協力してもらいたいんやけど。協力してくれへんか？」

はやては心配そうに二人に問う。だがそれは杞憂に終わった。

「はやてちゃん、6課設立のときも言ったけど……私たちがいつでもはやてちゃんに協力するよ」

「そうだよはやて。むしろ誘ってくれないと怒るとも言ったよ。」

なのはとフェイトは微笑みながらそう答えた。

「ほんまにありがとう二人とも!!」

ここに新しい部隊の設立が決定した。

~~~~~

第04話 「新部隊?いいえ、ほぼ前のままです」(後書き)

更新遅くなりました。(。、。、。)

昨日中に挙げるつもりだったんですが作者の体力が尽き挙げられませんでした.....

楽しみにしていただいていた皆様、申し訳ありません>m<」」

m<

ここからは少し飛ばしていこうと思いますのでよろしくお願ひします!!

オリ主プロフィール（前書き）

そろそろプロフィールを載せるところと思います!!
結構設定は考え込みながらやりました。

オリ主プロフィール

1：レオン・イエーガー

イメージCV 鳥海 浩介（テイルズ オブ ヴェスペリア：ユリ・ローウェル、ぬらりひよんの孫：黒田坊など）

年齢 23歳

身長 179cm

階級 元二等空佐

所属 時空管理局本局第037機動部隊元隊長

魔法術式

ミッド式 空戦 AAランク

魔力ランク SSS

性格 明るく冗談好き

女性の頼みは断れない

かなり不真面目（書類仕事に限る）

世話焼き

心配性

外見 髪は茶髪セミロング（肩より少し下まで伸ばしている）

瞳の色は黒

首に十字架のネックレスをしている

趣味 車やバイクの整備やドライブ、ツーリング

デバイスや新しい装備の開発
ゲーム、アニメ、マンガなど e t c

特技 超長距離からの狙撃（デバイスのサポート有りで最長15 km）

車の運転（ドリフトが得意）

新武装の開発（自分専用デバイスやカートリッジなど）

取得資格

普通自動車免許、デバイスマスター、大隊指揮官資格

魔力光 深紅

設定

基本的にはノリのいい兄貴キャラで少しグウタラ。趣味には全力。4歳の頃に連続殺人事件に巻き込まれ両親と、仲のよかった幼馴染一家を殺害された過去があり、それ以来アレンや仲の良い友人などがちよつとした怪我でも負うと過剰に心配するようになった。

連続殺人の犯人は逃亡中の次元犯罪者で、駆けつけた管理局員によって逮捕され、レオンとアレンはその場で保護された。

その後二人に魔法の素質があることが判明し、特にレオンはリンクアの発達が異常に早く、

現在は魔力量だけならなのはやはやてをも凌ぐほど。2年間の施設生活の後に6歳から管理局で訓練を受け、12歳の時に空戦B+ランクを獲得した。

14歳ではデバイスマスターの資格を取得し、この時の階級は二等空尉であった。

更に17歳で大隊指揮官資格取得。18歳で階級が二佐になり本局第037機動部隊を率いる。

なのは達の裏に隠れたエースであり数々の難事件を解決していたが、彼が初めて部隊長を務めた年に起こったロストロギア横流しの事件の捜査の際、犯人を突き止めたまではよかったが、黒幕は管理局の将官クラスの間人であり、決定的な証拠を得ようとした矢先に逆に罪を着せられてしまい、追う側から追われる側になってしまった。当然彼を擁護する者もいた（主に彼の部下）が結局上層部に抑えられて何の対策もできなかった。

その結果、彼は管理局を解雇処分+指名手配という最悪な自体に陥ってしまった。

後日、その事件はキチンと解決（最後は将官の自白）し、解雇処分はなかったことになったのだが、その情報が一切彼の耳に入っておらず未だに追われていると勝手に思い込み、他世界のとある街近郊の山中のアジトに引きこもっていた。

デバイス

銃型（変形機構あり）インテリジェントデバイス

名称

オルタナティブ イメージCV 神谷 浩史

待機状態

指輪（右手の人差し指に付けている）

概要

レオンが自分専用開発したデバイス。愛称はオルタ。言いたいことははっきり言うタイプで、ツツコミ気質。

空のカートリッジを排莢しないまま入れておくと、射撃の際の余剰魔力を空カートリッジに集めることができ、魔力のリサイクルができる。ただし、一発のカートリッジを満タンにするのにも相当の間がかかる。

変形機構が搭載されており

接近戦向きで基本形態のトウ・ハンドモード（2丁拳銃で見た目はリボルバー拳銃）、

超遠距離狙撃や対物に特化したA・Mモード（アンチ・マテリアルの略で見た目はBarrett M82）、

大人数を相手にできるバーストモード（全12機の小型ガンビットと2丁のライフル）、の3種類がある。

どの状態も銃のグリップ部に紅いデバイスコアが付いている。

バリアジャケットはミリタリージャケットにロングコートのようなデザイン。

通常は深い緑色だが、狙撃時は戦闘箇所地形等によってオルタナティブが自動でカモフラージュしてくれる。

自爆機構付き。

2：アレン・イエーガー

イメージCV 保志 総一郎（ひぐらしのなく頃にシリーズ：前原圭一、機動戦士ガンダムSEED：キラ・ヤマトなど）

年齢 20歳

身長 173cm

階級 一等陸尉

所属 時空管理局 陸上捜査部隊

魔法術式

ミッド式 陸戦 S - ランク

魔力ランク AA

性格 生真面目

おとなしい（普段は）

バトルマニア（殺しではなくただ剣を打ち合うのが好き）

初心（女性に非常に弱い）

外見 茶髪のショートカット

瞳の色は黒

趣味 剣の試合

野菜や観葉植物の栽培

特技 剣技（1刀でも2刀でも強い）

料理（自家製野菜を使ったもの）

車の運転（タクシードライバーのような丁寧な運転）

取得資格

普通自動車免許、分隊指揮官資格、栄養士免許

魔力光 蒼

設定

非常に真面目で善悪は白黒はつきりつけないと気が済まない常識人であり、少し不真面目がちな兄に呆れつつも全幅の信頼を置いている良き弟。非常に責任感が強い。

魔導士の訓練を受け始めたのは兄よりも2年遅い8歳の時で、本当は兄の様に銃撃や砲撃の訓練を望んでいたが、魔力量がずば抜けて

高い兄の技を見て「ああ、こりゃ無理だ」と断念（レオンが異常なだけ）。剣術の訓練を始める。と同時に剣の才能を発揮し兄が空戦B+を獲得した12歳で、アレンは陸戦A-を獲得し、現在でもその剣技は進化し続けている。

彼の戦闘スタイルは、魔力をほとんど使わない純粋な”剣術”であり魔法は高速移動や身体強化、防御などにしか使うことはあまり無い。飛行魔法は苦手だが使えないことはない。

なお、兄が濡れ衣で管理局を解雇されたときは普段温厚な彼からは想像できないような怒りを露わにし、同僚が止めるのも聞かず、単独で真犯人の搜索、発見、及び尋問によって兄の無実を証明した。尋問を受けた真犯人（レオンに罪を着せた将官）が尋問室から出てきたときは真っ白に燃え尽きていたそうだ。

デバイス

剣型（変形機構有り）インテリジェントデバイス

名称 ベステーク イメージCV 宮野 真守

待機状態

グループ（左手にはめている）

概要

レオンがアレンのために暇つぶし兼運用試験の目的で制作したデバイス。

正確は冷静だがとても熱くなりやすく、主人同様バトルマニアの気がある。

形態は3種類あり、

手数重視のデュアル（双剣）モード、

振りの速さと斬撃の重さの両方のバランスを重視したソード（西洋剣）モード、

一撃必殺の威力のみを重視したギガント（大剣）モードがある。

バリアジャケットは白い騎士甲冑に青いマントで、その防御力は並大抵の砲撃魔法ならシールドなどを展開せずに直撃してもかすり傷にもならない程。デバイスコアは青色でどの形態でも剣の柄に付いている。

オリ主プロフィール（後書き）

最新話と一緒にUPするつもりでしたが先に上げます!!

これで読むときにキャラの想像がしやすいと思います!!

結構無理やり感があるような・・・

まあいいや!!

最新話は現在執筆中ですので近いうちに上げたいと思います!!

お楽しみに!!

第05話 復職（前書き）

今回は自分の部隊に帰ったレオンの話を書きます!!
いきなりですが新キャラが出ます。
そこんとこよろしくお願いします!!

第05話 復職

~~~~~

レオン side

「おつ、変わってねえな。もつとひでえもんになってるんじゃないかと思っただけだな」

アレンやゲンヤさんと再会した次の日、俺は以前所属していた「時空管理局本局第037機動部隊」の隊舎に戻ってきた。部隊や隊舎の規模は大きくはない。俺がいた頃は結構小綺麗に掃除していたんだがいない間も掃除はしていたらしい。

「俺がいない間にもつと荒れるかと思っただがそうでもなかったみたいだな」

なにせこの部隊、7:3で男性局員が多くて色んなものが大雑把なんだよな。それでもこの綺麗さを保っていたことに俺は感心した。

「まあ、とりあえず中に入るか」

俺は隊舎のドアをくぐった。

エントランスはこれまた意外な程に綺麗だ。まあここは汚れようがないしな。俺が確認しながら歩いていると、

バサッ！



なんかむさい男性局員達に囲まれた。

「隊長!!!5年間もどこに行ってたんですか!?!」「俺らがどんだけ心配したと!?!」「どこで何をしてたんですか!?!」「いつ帰ってきたんですか!?!?」

「ちょ、おま、お前ら暑苦しい!!落ち着けて、おい!!!」

なんだかみんなテンションがおかしい。ちょ、マジで掴んだりするの勘弁.....

と、とりあえずこいつらを落ち着けないと俺の身が危ない気がする。

「お前ら、ちよつと落ち着k.....」

「きゃあああああ、レオン隊長おおおおお!!!」

「!!!!!?????」

今度はなんだ!?!

「みんな心配してたんですよ!!!」「本当に.....本当に無事でよかった!!!」「うわあああああん!!!」

今度は女性局員か!!!てかなんか泣いてる子がいるのは気のせいか!?!?

「ああああ、もう!!!みんな落ち着けえええええええええ!!!」

-----

20分後 . . . . .

「はあ . . . . . ようやく落ち着いたか」

「 . . . スミマセンでした . . . . . 」

みんなを落ち着けるのにかなり時間がかかった。騒がしすぎるぞこの部隊!!

「でも俺たちに何も言わずに居なくなっちゃったらそりゃ心配するでしょう?」

「そうですよ! 私たちがどれだけ心配したと思ってるんですか?」

「それは本当にスマンかった!!」

それを言われると何も言い返せない。実際何も言わずに出てきたのは事実なんだし . . . . .

「でも . . . . . 」

「ん? どうした?」

部下の一人が何かを口にする。

「俺たちも隊長の無実を証明できなかつたなと思ひまして . . . . .  
」

「そうだな。俺たちがもつと頑張れば上官たちも納得してくれて、隊長が逃げないといけないことなんてなかつたのに . . . . . 」

部下の何人かがそんなことを言い出す。

「ふう。馬鹿かお前ら．．．．お前らは悪くねえし謝る必要もねえよ。悪いのはこん中の誰でもねえ。悪いのは俺に罪を着せた中将や、お前らの意見に聞く耳持たなかつた上官達だ。それにもう解決したことだしそんなに気に病むことはないぞ」

俺は思ったことをそのまま言っちゃった。ホントに俺は周りの人間には恵まれているらしい。ヤベツ、泣きそうだ．．．．

「それよりもお前ら。俺がいない間は誰がこの部隊を取り仕切ってたんだ？言っちゃ悪いがお前らのほとんどはデスクワークとか苦手な脳筋ばっかだし面倒なことは進んではやらないだろ？」

結構失礼なことを言ってる気がするが、事実この部隊の提出する書類は大半がひどいもので何回か本局からお叱りを受けたことがあるくらいだ。それでもマトモな書類整理ができる奴らもいるがやはり圧倒的に数は少なく、できない連中の手伝いなどに奮闘しており見てるこっちが可哀想になってくる。それでも不平は言わずに作業をしてきているのでこの部隊は成り立っている。

話がずれたが隊長不在の際に誰がこの部隊を仕切っていたかだったな。

「ああ、それならレイブン三佐が率いてくれましたよ」

「ほお、レイブンが？」

レイブンとは俺が隊長をしていたときの副官で、デスクワークも魔法戦もそつなくこなせる万能野郎だ。

「はい。レオン隊長のときよりデスクワークがスムーズかつ正確に提出されるので本局からお褒めの言葉をもらいましたよ」

「あ、ああ。そうなの……」

確かにデスクワークは大嫌いだし苦手だけどはっきり言わなくても……俺だって頑張ってたのに……グスン……

「んで、そのレイブンはどこなんだ？」

「ちょっと待っててください。呼んできます」

俺が現隊長の居場所を聞くと部下の一人が呼びに行ってくれた。

レオン side out

レイブン side

俺は最近増えている魔導士殺害事件の書類を整理していた。もう既に報告件数が16軒もあり管理局の面目は丸つぶれもいところだ。どうやら捜査に行った局員までもが被害を受けているらしい。この部隊からも魔導士を何人か捜査に向かわせたが全員収穫はなかった。それでも無傷で帰ってきてくれるならそれで良しとしなければならぬか。

「本当なら俺が直接敵を叩きに行きたいが……今の立場じ



「やそもいかないか」

隊長が戻るまでは俺がこの部隊を取りまとめなければならぬ。大雑把なところがある隊長だったがそれでも俺を始め部隊全員から信頼されていた。そんな隊長が帰ってきたときに「部隊は解体されました」なんて口が裂けても言えはしない。

「レオン．．．．．お前今どこにいるんだ．．．．．」

俺がそんなことを考えていたとき、部屋の外が異常に騒がしくなった。まあ元々静かな部隊ではないのだが。

「何かあったのか？」

俺がドアに手を掛けようとしたその時、ドアが開いて部下が飛び込んできた。

「レイブン隊長ー！！」

「な、なんだいきなり！？」

そんなに叫ばなくても目の前にいるんだから聞こえる。

「レオン隊長が、レオン隊長が帰ってきました！！」

「何！？」

レオンが帰ってきた！？5年も音沙汰無かったのに！？

「エントランスにいますにですぐそちらに！！」

「わかった。すぐに行く」

俺は報告に来た部下と共に部屋を飛び出した。

レイブンスideout

~~~~~

inエントランス

レオンが部下たちに囲まれているエントランスへレイブンがやってきた。

「おお、レイブン久しぶりだな!!」

「ああ、久しぶりだなレオン”隊長”」

お互いに挨拶を交わすがレイブンの様子が変だ。

「どうかしたのかレイブン？」

レオンがそう聞く。

「どうかしたのか？じゃあるかあああああああ!!」

「!?!?」

レイブンがいきなりキレた。

「お前いきなり居なくなつて、いきなり帰つてきてそれかあああああ！―先に言うことがあるだろうがあああああああ！―」

「スンマセンでしたあああああああああああああああ！―」

レイブンのもの凄いい剣幕にレオンは思わず土下座した。

「この5年間俺たちがどれだけ心配してたと思う！？ていうかお前の仕事は誰がやってたと思ってるんじゃないこのボケがああああああ！―」

「もうホント色々スンマセン！―もうそれしか言えねえ！―」

レオンは頭が上がらない。しばらくするとレイブンも怒りが収まってきた。

「そつだ、おいレオン。お前が帰ってきたらやりたいことがあったんだ。ちよつとツラ貸せ」

「あの、俺一応隊長なんだけど……………」

「なんか文句でも？」

「なんでもありません……………」

「弱い！―弱すぎるぞ隊長！―」

「ところでやりたいことってなんだ？」

レオンがそう問いかける。

「ああ、模擬戦だ。1：1のタイマンだ。俺も誰かさんのせいでも年間もデスクに縛り付けられたような生活で実戦からはかなり離れていたからな。久々に体を動かしたかったんだ」

「そういうことが。OKその勝負乗った！」

「そこなくっちゃな」

二人の間にバチバチと火花が散った。(ような気がした)

~~~~~

## 第05話 復職（後書き）

という訳でレオン君が部隊に戻りました！！ここまで書くのが長かった！！長い文章を書くのって難しいのは自分だけでしょうかww  
w?（苦笑）

さて今回出た新キャラのレイブンですが近いうちに先日のプロフィールの方にキャラ設定を書き込みますのでそちらで詳細は確認していただきたく思います。では今回はこの辺で。いつも読んでいただいている皆様に感謝！！感想や評価などもお待ちしておりますのでもしよろしければそちらもお願いします> m ( ( m <

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3199y/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikerS～不真面目・生真面目・凸凹兄弟in新生機動

2011年12月2日01時45分発行